

〔自著紹介〕

桜井美加

教育相談ワークブック（新版）

— 子どもを育む人になるために —

北樹出版 2024年

桜井美加・齋藤ユリ・森平直子著

本著は、2016年に出版された教育相談ワークブックを2022年文部科学省による生徒指導提要改訂を受けて、内容を一部改訂・増補し、統計資料も文部科学省のホームページに掲載されている最新のデータに更新して新版として発行されたものである。これまで通り、本著の大きな特徴は、小学校と中学校において、実際に遭遇しそうな事例を示し、グループワークで話し合い実践的な力をつけることができるようになっている点である。また、構成的エンカウンターグループ、コンセンサスグループワーク、アサーショントレーニングを体験することで、自身のコミュニケーションの力やグループでのファシリテーション能力を育むことができる。

第1章は教育相談の目的や4つの機能について解説している。教師が生徒や保護者に向けて教育相談を実施することの意義や機能について、生徒指導提要から新たに示されている「プロアクティブ」「リアクティブ」に分けられた段階的な予防介入について述べられている。

第2章は学校における連携と協働である。文部科学省から提案されているチーム学校について、なぜ連携が重要か、また多職種の専門家同士が協働することの意味および困難な側面、そしてそれをどのように克服していくかが述べられている。

第3章では児童生徒理解のためのアセスメントについてである。現在我が国におけるアセスメントで主流とされているのは、生物・心理・社会モデルである。一見心理学的問題のように見えても、どのような地域、学校に当該児童生徒が生活しているのかという社会的背景や、そもそも持ち合わせている生物的要因（発達の課題など）が関連しあって、ひとつの問題もしくは課題として表されているのかという理解が求められている。これらの理解を深めるために「アセスメントシー

ト」を用いて、各自が検討し、ディスカッションできる事例課題を設定している。

第4章は、カウンセリングの基本についての学びである。ここでは学校現場でよく用いられているカール・ロジャーズによる来談者中心療法におけるカウンセリングスキルが解説されている。さらに理解的返答のための具体的方法についても併せて述べられている。カウンセリングでは、オープン・クエスチョンが使用されることで、児童生徒が悩みなどを開示しやすいように言われているが、つらいことは言語化することが困難を極めることもあり、そのような場合はクローズド・クエスチョン（はいかいいえで反応が可能）を用いることなど、ケースバイケースでスキルを適用できるように示してある。

第5章は、児童虐待への理解と対応については、児童虐待の定義や分類に始まり、児童虐待がどのように子どもに心身の影響を及ぼすか、また教師に望まれる早期発見早期介入について具体的に示されている。

第6章は特別支援教育を必要とする子どもたちについてである。発達障害（ADHD,LD,ASD）の特性について述べてあり、発達課題がある子どもたちへ関わる際の姿勢や配慮、工夫について述べている。このような子どもたちに対する教師からの声掛けの方法は非常に重要となる。具体的にどのように伝えれば、発達障害の子どもたちに伝わりやすく、落ち着いて受け止めてもらえるのか、またそのような学習態度を習慣化しようと動機づけられるのかについて述べられている。

第7章は不登校の子どもの理解と対応である。不登校に至る要因を学ぶことでそのような状況にある子どもたちへの理解を深め、当該児童生徒および保護者への関わり方について学ぶことができる。履修者が教師になったときに役立てることができる不登校への対応チェックリストも掲載されている。

第8章は、いじめの被害者・加害者への理解と対応である。いじめ防止対策推進法が施行された以降も、学校におけるいじめ認知件数は右肩上がりである。本書の特徴としては、いじめが止まり被害者が安心して学校生活を送ることを可能にするのは、加害者である児童生徒が「いじめを止めよう」と決意し、実行することであると考えている。そのためには教師からいじめ加害生徒への能動的な関わりが重要で、単なる叱責や、謝罪させるという方法ではなく、なぜいじめ行為に至るのか、どのように話すと加害者の立場の理解も進み、加害行動が抑止されるのかということがわかるように示されている。

第9章は非行問題への理解と対応である。非行少年への教育相談も単に一方的に説教するのではなく、心からその少年が「変わった方が、変えたほうが自分にとって心地よい人生となる」と思うに至るか、そしてそのようにサポートできるかということをカウンセリングスキルの紹介と共に丹念に述べてある。

第10章では学校における危機介入と心のケアである。防災の観点からも書かれているが、学校における危機とは自然災害だけでなく、事故やいじめなども含

まれる。コミュニティ心理学のモデルを背景にしつつ、トラウマとそのケアについても学ぶことができる。また児童生徒の自殺予防については、昨今日本の子どもをめぐる問題の中で最も悩ましいことであり、教師が気づくべきサインやそのような子どもたちへの対話の方法などが紹介されている。

第11章は知っておきたい心のトピックスとして、心身症、不安障害、うつ病などの精神疾患について述べてあるのと同時に、昨今特に思春期の子どもたちに広まっていると思われる、リストカットなどの自傷行為、摂食障害、ネット依存で悩む子どもたち、性的マイノリティに対する理解と対応、支援を必要とする家庭環境（子どもの貧困、ヤングケアラー、外国籍の子ども）への働きかけ、コミュニケーションの取り方について紹介している。

第12章は保護者への理解と対応についてである。保護者も児童生徒と同様多様である。学校に対する期待は高まっており、また家庭内での人間関係に悩むものの孤立して相談相手に困る保護者も多く見られる。そのような保護者の心理的ニーズをくみ取り、どのように丁寧にコミュニケーションをとることが望ましいかについて述べられている。

第13章は教師のメンタルヘルスについてである。ストレスコーピングの紹介などを始め、燃え尽き症候群になることを防ぎ、メンタルヘルスを向上させるための方法について述べられている。

最終章は、第14章学校現場で役立つワークについてである。構成的グループ・エンカウンター、リフレーミングワーク、コンセンサスグループワーク、アサーショントレーニング、学校生活に見られる関係性攻撃への対処方法としてのアンガーマネジメントの方法が紹介されている。

教師が子どもにとって親以外のもっとも身近な相談しやすい存在として、これから教師になろうとしている大学生が、ワークを通して体験的に学び、子どもにとって親以外の最も身近な相談しやすい存在となることができるように、このワークブックが様々な大学の授業で活用されることが望まれる。